



Vol.44

大口の真神が原

日本で最後にニホンオオカミが捕獲されたのは、奈良県の東吉野村です。現在の日本では野生のオオカミは姿を消してしまいましたが、古代の人びとはオオカミを神として畏れていたようです。今回の歌は、このオオカミにまつわる一首です。

この歌には、「真神が原」という地名が詠まれています。「真神が原」は、「明日香の真神が原」(巻二・一九九)とも詠まれており、現在の明日香村にある飛鳥寺や万葉文化館付近の一带を指す呼称と推定されています。そもそも、古代では恐ろしい動物を神と呼ぶことがあり、この「真神」という言葉はオオカミを指すと

おほくち
まがみ
大口の真神が原に 降る雪は
いたくな降りそ 家もあらなくに

とねりのおとめ
舎人娘子
巻八
一六三六番歌

【訳】 大口の真神の原に降る雪はひどく降るな。家もないことだのに。

考えられています。その「真神」の枕詞である「大口の」は、オオカミの大きな口をイメージさせます。この「真神が原」という呼称は、神であるオオカミが住むような、畏れと神聖さの入り交じった特別な原であったことを意味しているのでしょうか。

今回の歌の作者の舎人娘子は伝未詳の女性です。雪を瑞祥とする万葉歌もある中で、彼女は雪が降らないでほしいとうたっています。「家もあらなくに」という言葉から推測すれば、彼女はどこかへ出かけて行く途中で雪に降られたか、もしくは旅に出た大切な人のために、雪よひどく降るなど詠んだのでしょうか。宿る家もない心細さと、オオカミが住まうという「真神が原」を通過する不安が募るように、雪がしんしんと降

り積もっていく光景が想像されます。古代の人びとの動物や自然に対する思いは、枕詞や地名と深く結びついているのです。

(本文 万葉文化館 大谷歩)



明治38年に、吉野郡小川村鷲家口(現・東吉野村小川地区)で捕らえられたニホンオオカミをモデルとした等身大のブロンズ像。この東吉野村での捕獲が日本最後の記録となり、最後のニホンオオカミは、ロンドンの自然史博物館に標本として所蔵されています。「採集地ニホン・ホンド・ワシカグチ」と記録され、動物学上の貴重な資料として保存されています。

問 東吉野村教育委員会事務局 ☎0746-42-0441

ニホンオオカミの像



万葉ちゃんの
つぶやき
和歌に関連するものを紹介するよ!!



万葉ちゃん